

国

語

〈受験学部・学科〉

3科目型 受験者

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、
理工学部(住環境デザイン学科・建築学科・都市環境工学科)、
農学部(食農ビジネス学科〔文系科目型〕)

2科目型 受験者

法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、
看護学部、農学部(食農ビジネス学科)

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(五四点)

ミツバヤツメという生き物をご存じだろうか。北アメリカ大陸の太平洋岸に広く分布していて、日本のヤツメウナギよりもずっと大きく、体長は七〇センチほどになる。薄茶色の表皮はぬめぬめとしていて、細長い。吸盤状の口を開ければ、「ミツバ」という名前にふさわしく、ぎざぎざした歯が円形に三列生えそろう。ミツバヤツメはその口で大型魚の横っ腹に食いついて体液を吸う。顎はない。外見もさることながら、大型魚への被害をもたらす魚であるから、漁師たちにはひどく嫌われる。実際に、大西洋岸に生息する類似種のウミヤツメは、河川・湖改修によって五大湖周辺に遡上するようになり、養殖場のサケやマスに大きな被害をもたらし、クジヨの対象にもなっているくらいだ。

だが、太平洋側では少し事情が異なる^I。漁師は漁師でも、もともと北米大陸に長らく住んできた先住民族の漁師たちにとっては、ミツバヤツメはとても大切な、そして何よりも心踊る獲物である。その身は脂がたっぷりとのって滋養があり、さばいてから串に刺して直火であぶり焼きにしても、燻^{いぶ}してスモークにしても、あふれ出る脂と弾力のある独特の食感があって美味だと好まれる。たし

かに、スモークされた身をもぐもぐと噛めば、口じゅうに豊かな脂と旨味が広がり、飽きない。かつては、一族で一晩に千を超える数のミツバヤツメを獲ったのだという。昔からミツバヤツメは、質・量ともに兼ね備えた、大切な栄養源だったのである。それゆえに、ミツバヤツメは、サケとならぶ存在として先住民族に大事にされてきた。カナダを流れるコロンビア川では、その年のサケを迎えるファースト・サーモンと呼ばれる祭事と同様に、ミツバヤツメを迎える祭事を設けている先住民族集団もいるほど、先住民族にとっては、生活を昔から支えてきた重要な食料なのだ。

以降、ミツバヤツメを先住民族たちの言い方に倣い、「ウナギ (eel)」と呼ぼう。ミツバヤツメと呼んでいたのでは、彼(女)らが大事にしている感覚が伝わりにくいからだ。そのうえで、ここでは、「ウナギ」と先住民族ユロックをめぐる関わりのあり方を描きながら、自然に関わる伝統的な知識、いわゆる「伝統的(土着的)生態学知識」が、ユロックにとってなぜ重要で、どのような理由から順応的な自然資源管理と密接に関わっているのか、考えてみたいと思う。

物語の舞台は、クラマス川河口域、主人公は先住民族ユロック (Yurok) である。クラマス川は、オレゴン州のアップークラマス湖にタⁱⁱンを発し、カリフォルニア州の北西岸で海へと入る全長四二三キロメートル、総流域面積四万七九五平方キロメートルの大きな川だ。河口域はレッドウッドやダグラスファーなどの大きな木々を抱える深い森と巨大なエルク(アメリカアカシカ)の行き交う湿地、キングサーモンやギンザケ、「ウナギ」などの豊かな水産資源の宝庫である。だが同時に、その資源と、水と地形が生み出すエネルギーを利用するために、灌漑^{かんがい}やダム建設が進み、川の形は二〇〇年の間に大きく様変わりしてきた。

一方、かつては北西岸有数の人口を誇っていた先住民族ユロックは、狩猟・漁撈^{ぎょらう}文化の担い手として、そして美しいバスケット(編みかご)文化の担い手としても知られている。また、後述するが、サケ資源をめぐる、州や連邦政府と「サケ戦争 (Fish War)」を闘ってきた先住民族として有名な人びともある。そのユロックは、移入者たちが金採掘の夢を追いかけたとき、農場の水と電気エネルギーを求めたとき、またはサケを商品としてとらえたとき、あるいは逆に自然保護の対象としてとらえたとき、その時々¹に翻弄¹されながら、Xをめぐる他者との争いに身を置いてきた。

争いの渦中でひととき目立ってきた生物はサケである。先住民族文化の代表的なシンボルでもあるサケは、常にクラマス川流域の資源争いの中心となり続けてきた。

サケに比べ、「ウナギ」は、先住民族以外にはほとんど受けの悪い生き物である。自然保護でも資源管理でもその注目度はサケに遠くおよばない。1、ユロックの傍らで過ごしてみると、

彼(女)らにとって、「ウナギ」がサケに匹敵するどころか、ときにはそれ以上に重要な意味を持つ生物であることがわかる。

「ウナギ」がユロックにとって持つ意味は何だろう。実は、先に述べた問い、伝統的(土着的)

生態学知識と順応的資源管理の関わり、それがユロックに必要な理由への答えは、「ウナギ」に潜んでいる。

それではまず、エピソードとインタビューから得た言葉から、クラマス川のユロックと「ウナギ」の関係を見てみよう。後ほど学問的な文脈をていねいに追いかけていくことにして、まずは物語として読んでいただきたい。

早春、クラマス川には、キャンドルフィッシュがやってくる。日本のワカサギにも似たこの魚は、長い冬が明けて春が来たことを知らせる魚だ。キャンドルフィッシュに導かれるように、キングサーモン（和名マスノスケ）が、四月から七月の間に遡上する。春のキングサーモンは、ユロックにとって、四月に行うファースト・サーモンの儀式に見合う、真のサケである。ファースト・サーモンの儀式こそ行われていないが、現在でも彼（女）らにとって特別の意味を持っている。

夏はチョウザメ。クラマス川には、シロチョウザメとミドリチョウザメの二種類が遡上する。現在では、その姿はあまり見ることができないと漁師たちは嘆く。

秋には再びキングサーモンがのぼる。早いものは六月頃から上流に向かい始める。一一月後半からはギンザケが、またスチールヘッド（降海型ニジマス）が一月終わりまで産卵のために遡上してくる。サケの姿がなくなると、「ウナギ」がやってきて、ユロックの胃袋を満たす。寒い冬を「ウナギ」と越えると、再びキャンドルフィッシュがやってきて、春を告げる。

このように、一年を通じて、ユロックの食を支える魚が入れ替わり立ち替わりクラマス川にやってくる。漁具・漁場の準備から、獲って保存食品にするまで、その一連の過程にともなう、贈与を通じた社会関係の構築やギレイなどの文化的な営みが、長い間ユロックの生活文化を支えてきた。

しかしながら、クラマス川流域は、この一〇〇年ほどの間に大きく姿を変えてきた。あらゆる意味で象徴的なのが、二〇〇二年の「クラマス・フィッシュ・キル」と呼ばれる出来事である。同年八月最後の週、続く九月最初の週、クラマス川の河口から約五五キロメートルにわたって、文字どおり、悪夢のような光景が広がった。

「岸を歩いても歩いても、そこらじゅう死んだ魚だらけだった。こんなに大きいやつまで、転がっていた。毒だよ、川が毒された。そして魚たちを殺した」

約三万三〇〇〇匹のサケ類が死んだといわれるこの出来事を語るとき、ユロックの長老で有名な漁師のSさんはいつでも、何度も「川が毒されたからだ」と繰り返し返す。魚類の直接的な死因の多くは、カラムナリス病と白点病だったが、大量死を招いた原因は、明らかに、上部にあるアイアン・ゲート・ダムが上流の農家の水利用のために上流で水をせき止めたことにあった。その結果、水量の減少と水温の上昇、水質の汚濁などが複合的に引き起こされたのだ。

「毒された」とSさんが語るとき、それは単なる「汚染」を意味しない。

ユロックは、一八五一年に米国の連邦政府と友好条約を結びえた居留地（＝公的に自分たちの土

地と認められ、自治権を持つことができる地域）を、一八六一年から六二年の冬に起きた大洪水にともなう避難をきっかけに失った。同時期、ゴールドラッシュによる鉱山開発は川を汚染し、商業漁業者による漁業資源の乱獲、^{iv} パッサイ企業による森林の私有化も進んだ。上流部の白人入植者たちのために、一八八二年から始まった大規模な農業用の灌漑事業は、流域に大小一〇を超えるダムをゾウセイし、流域全体の水量と川の形を変えた。ダム建設は、沿岸域におけるトロール船漁による漁獲庄の高まりと同様、後のサケをはじめとする遡河性魚類減少の主要な一因とみなされている。「毒された」という言葉は、白人移住者が現れて以来、土地と自然資源利用の権利を「合法的に」奪われ、白人移住者による利用を優先する形に流域が改変されてきたこと、その歴史的経緯ゆえの「汚染」であることを意味する。

一方、クラマス川流域は、白人移入者による開発が始まった当初から、「自然保護」運動の熱心な対象でもあった。とくに、一九二〇年代になると、サケ資源は大きく減少し、その資源をめぐってスポーツフィッシング団体や自然保護団体、自然資源管理者としての連邦・州政府は、ユロックら流域に居住する先住民族たちと大きく対立するようになった。

ユロックは居留地を失っても、生活の場である流域に戻って生活していた。そして変わらずにサケや「ウナギ」を獲り、エルク（アメリカアカシカ）を狩って生活していた。だがそれは、他の資源利用者や連邦や州などの資源管理主体にとっては、「違法行為」以外の何ものでもなかった。

数多くのユロックの人びとが逮捕され、それでも漁撈と狩猟を繰り返した。転機を生んだのは、何度となく逮捕されていたあるユロックの若者が、漁業権を求めてカリフォルニア州漁業狩猟局と争った一連の裁判と、一九七三年に出た判決だった。その判決内容は、元居留地の土地を実質的にユロックの土地であると認めるものだった。

この判決を受け、ユロックの人びとは、刺し網漁を再開した。

だが、激減したサケの資源管理を試みていた連邦や州政府、スポーツフィッシングや自然保護派の人びとは、ユロックの行為を違法とみなし、取り締まりを強化した。ユロックの経験と知恵にもとづいた漁獲量・時期の調整など、漁獲の自主規制を主としたユロックなりの「資源管理」の正統性（レジティマシー）は認められなかった。主張の食い違いは激しさを増し、一九七八年について両者は激しく衝突した。ⁱⁱⁱ 「サケ戦争 (Fish War)」と呼ばれる争いである。ボートで網をかけるユロックは銃を向けられ、逮捕された。

サケ戦争は連邦・州政府にユロックの先住民族権について目を向けさせると同時に、ユロックの人びとを政治化し、居留地返還に至る大きな契機を生んだ。もちろんその背景には、六〇年代以降、米国に広がっていた先住民族運動の影響も色濃い。

最終的にユロックが居留地を取り戻したのは、一九八八年一〇月三一日のことである。一九九三年、ユロックは先住民族政府として憲法を制定し、名実ともに先住民族政府が承認された。

この一連の出来事の中に、ユロックは流域資源をモニタリングし、資源管理のプログラム策定と実践のために、数多くの自然科学者を雇うようになった。

2 現在では、ユロック先住民族政府の漁業局は、全体の漁獲を統括する漁獲管理マネジメント、ロウアー・クラマス川、トリニティ川、クラマス川の各部局にそれぞれ自然科学者を複数抱え、モニタリングと漁獲管理を自分たちで行っている。

とくにサケ資源については、科学的知識と技術を導入しながら、人びとの生活を支えるだけの漁獲はできるよう、細かく漁期や漁法・漁獲量を定め、順応的資源管理を行ってきた。

たとえば、二〇一一年の春から夏にかけての漁獲制限をみてみよう。春に遡上するキングサーモンに関していえば、Y 目的の漁獲は一切認められていない。各人、自家消費する分は認められる。キングサーモンは週に一〇匹、同じユロックのメンバーか、その他の先住民族に贈与・物々交換する分としてのみ、獲ることが認められている。つまり、市場は介さず、自分たちの生計や贈与を軸とするユロック内部の社会関係を支えるための漁獲のみが認められている。

加えて、科学的なモニタリングと、これまでの漁師の経験や言い伝えの聞き取り調査を照合したサケの生態の詳細な調査にもとづき、産卵場所の保護や環境改善が行われている。

それは、自分たちが利用する資源の確保のためのみならず、連邦や州に対し、自分たちこそがクラマス川流域の自然資源の利用者として、土地の所有者として正統性を持ち、資源管理を的確に行うことができる行為主体である、と示すことを目的としている。

一方的な開発と自然保護のまなざしに翻弄されてきたユロックは、こうして、みずからが資源管理の主体としてふさわしいと他者に示し、先住民族権を守る道を選んだのである。

順応的資源管理がユロック社会のなかで重要な位置づけを占めると、サケと「ウナギ」、それとユロックの関わりの変化が生じた。今のユロックと「ウナギ」の関わりを見ながらその変化をとらえてみよう。

冒頭に述べたとおり、ユロックにとって「ウナギ」は特別な生き物である。二〇一一年現在、「ウナギ」もまたユロック先住民族政府のモニタリング下にあるが、漁獲については、サケとは異なり、河口域でのイールフックを使う漁であれば、禁止時期はなく、量も制限されていない。そこで、一月がくると、男たちはイールフックを持って出かけていく。

二月の初め、クラマス川の河口域を訪れると、焚き火に人びとが手をかざして集まっている。一つの焚き火に、家族とその縁者が集まり、なにごとかを話したり、炎を見たり。そこから海岸線近くに目をやると、防寒具とつなぎに身を包んだ男性たちが、イールフックを持って波打ちぎわに立っているのに気づく。その姿はかなり寒そうだ。

長い間、男たちは動かない。彫像のように立って、打ち寄せる波を見ている。
だがそのうち、不意に一人が動く。

素早く駆けて、フックをふうつと振りかぶり、ぱつと上にあげると、長いものがその先にひっかかっている。

「ウナギ」だ。

ゆつくりと浜辺に戻つてくると、焚き火の周りにいた人に「ウナギ」を見せながら、袋のなかにしまいこむ。彼が広げた袋のなかには、その日に獲れた「ウナギ」が、によりりによりりと腹を見せている。

再び海岸線を見ると、今度は別の若者がイールフックを持って振りかぶり、波に向かっていく。鈍い灰色の雲がどこまでも広がる波打ちぎわで、漁は続く。

獲る、という行為のおもしろさが惹きつけるのか、「ウナギ」^{IV}漁には若者も多い。

獲った「ウナギ」は家でさばかれる。さばき方にもコツがある。ユロックの長老Sさんの家に来ていた、別の長老Dさんの孫、Cさん（二〇代、男性）は、鮮やかな手さばきでさばきながら、「まだまだだ」と言う。ユロックの若者世代の間で一番の腕だといわれるCさんはこの日、少し浮かない顔をしていた。

隣にいたCさんの友人のEさん（二〇代、男性）が、「こいつはこの前、Sさんにもらったイールフックを流しちゃったんだ」と教えてくれた。

聞けば、そのフックは、成人のお祝いにSさんが彫刻と模様入れを施してくれたもので、それをもたらえるのは、漁師として将来性を持っている証なのだという。

なるほど、といつもSさんが座っている安楽椅子の上を見ると、たくさんのイールフックが誇らしげに吊り下げられていた。きれいに彫刻と模様が施され、優美なカーブを描いている。

Sさんに聞けば、そのようなイールフックへの彫刻と模様入れを始めたのは、Sさんが初めてだという。

Cさんが、「ちゃんと漁がうまくなって、またSさんにフックをもらえるように、自分でも作れるように修行しないと」と肩をすくめて残念そうに言った。Sさんは何も言わずにパイプから煙をぷかり。聞こえているだろうけれども、反応はしない。

Cさんは、「これからEさんと出かけるから、今日は帰る」と言う。Sさんは軽くうなずく。私たちが「ウナギ」はどうするの?」と聞くと、四匹はオーブンで焼いて食べ、後の残りはスモークハウスで燻してから瓶詰めにすると言う。

家から出ていくまぎわ、Cさんはやつぱり少し残念そうに、Sさんが座っている椅子の上の、イールフックをちらりと眺めた。

実は、「ウナギ」をめぐる一連の話は、とても重要なことを示唆している。

一つは、「ウナギ」漁の周囲には人が集まること。とくに、「ウナギ」漁に関して知識と技術を持ち、フックを芸術的に作り上げる長老の周りには、親類縁者をはじめとする若者たちが集まる。そ

して、話を聞き、さまざまなことを学ぶ。

安楽椅子の前で始まるのは、別に「ウナギ」釣りの話だけではない。先住民族の重要な祭事、たとえば子どもの成長と長命を願うブラッシュダンスの話や踊り指導、昔の親戚の話、彼（女）らから聞いた昔のユロックの生活の話。繰り返えられるそれらのなかには、かなりの確率で流域の話がまじる。だからCさんは言う。

「いやってSさんのところにいると、ちょっと釣りのヒントみたいなものがわかる。もちろん直接は教えてもらえないけれど、川の流れのクセとか。それから、もっと大切だと思うのは、サケ戦争のこと、昔の川のこと、しきたりのこと。（そのような話を受け継ぐのは）次はおれたちの番だと思うから」

「ウナギ」の周囲には、流域の知恵や知識など、伝統的（土着的）生態学知識を伝え聞くための対話空間ができあがる。もちろん、ともに漁に出かけることで、その知識や技術は文字どおり、身についていく。

もう一つ重要なのは、このような関係性が、ユロック内部の人的ネットワークをつくるということだ。長老に敬意が集まり、ユロックの文化が引き継がれ、同時にユロック成員同士のつながりが保たれる。

「ウナギ」は、ユロックにとって不可欠な伝承と敬意の社会ネットワークを形成する重要な生物なのである。

（福永真弓「自然資源管理をめぐるサケと「ウナギ」の有象無象」一部改変）

問一 波線部 iゝ v のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問二 空欄 1 ・ 2 に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|---|-------|---|---|------|
| 1 | ア | だが | 2 | ア | しかし |
| | イ | したがって | | イ | おそらく |
| | ウ | さらに | | ウ | そして |
| | エ | そこで | | エ | むしろ |

問三 空欄

X

Y

に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | |
|--------------|-----------|
| X ア ダムの建設と灌漑 | Y ア 生態系保護 |
| イ 資源の利用と所有 | イ 趣味 |
| ウ ウナギの漁獲権 | ウ 商業 |
| エ 流域の生態系 | エ 研究 |

問四

傍線部Ⅰ「太平洋側では少し事情が異なる」とあるが、太平洋側の先住民族の漁師にとってミツバヤツメはどのような存在であるか。次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

- ア 大型魚に被害を与えるため漁師から嫌われている。
- イ 生活費を稼ぐための貴重な商品である。
- ウ 栄養源であり祭事の対象でもある。
- エ ユロツクの漁撈文化の中では些末^{さまつ}な存在である。
- オ あぶるとあふれ出る脂と食感が美味である。

問五

傍線部Ⅱ「何度も「川が毒されたからだ」と繰り返す」とあるが、Sさんがそのように語る背景について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

- ア 大規模な灌漑事業に伴う河川の変形
- イ スポーツフィッシング団体による過度な漁獲
- ウ ダムがせき止められたことによる水量の減少と水質の悪化
- エ 白人移住者による流域内の「合法的」な土地所有
- オ ゴールドラッシュに伴う鉱山開発による川の汚染

問六 傍線部Ⅲ「サケ戦争 (Fish War)」をめぐる出来事について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア ユロックの経験と知恵による資源管理と科学者の資源管理プログラムに相違が生じた。

イ ユロックは土地の所有者として正統性を持つことを示すために、サケの順応的資源管理を行うようになった。

ウ 開発による河川の変形や水質汚染とともにサケの漁獲量が減少した結果、ユロックの生活が困窮し、生活改善を求めた運動が始まった。

エ 連邦・州政府による漁獲量調整と伝統的なユロックの経験・知恵による資源管理手法が対立した。

オ ユロックが流域に居留する権利は認められたが、その後、連邦政府やスポーツフィッシング団体がそれに反発し、居留権に関する主張の食い違いが激化した。

問七 傍線部Ⅳ「ウナギ」漁には若者も多い」とあるが、ユロックにとって若者と長老が関わる「ウナギ」漁は栄養源の獲得の他にどのような意味を持っているか。本文中の言葉を用いて五十字以内でまとめなさい。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四六点)

日露和親条約(一八五五年)を起点としても一世紀半以上にわたる——漂流民など非公式のものまで含めれば、さらに長い歴史を辿ることができるが——日露の交流の中で、日本人のイメージはロシアにおいて様々に描かれてきた。例えば、日本に関し作家が記した最初のテキストとしては、イヴァン・ゴンチャロフの紀行文『フレガート艦パルラダ号』(1855-57)が知られる。ここには、非人間的な風貌と劣った文化を持つ野蛮人としての「日本人」が登場する。そのテキストからは、西洋中心主義的な優越感により、異文化としての東洋を劣位に位置づけ蔑視する視線が容易に浮かび上がる。

この他、文学テキストに表象される日本人は、概ね〈異質〉なものへの過度な賛美ないし嫌悪を基調に、様々な修辭が用いられ形作られてきた。その具象は、テキストの執筆時や発表時の作家を取り巻くイデオロギーにより多様化が促されたが、それらの根底には、繊細かつ優美な〈ムスメ〉(ゲイシャ)と高貴で野蛮な〈サムライ〉という、西欧近代文学に顕著な二種の典型が、ロシアにおいても生き続けている様子が見える。

ここでは、こうしたロシアの文学テキストにおける日本人表象の問題を取り上げる。ソヴィエト時代のV・ピークリの大衆的な歴史小説「オキヌさんの物語」を例にとり、そこにあらわれる「ムスメ」と「サムライ」の分析を通して、ロシアのオリエンタリズムの一面を明らかにしたい。また、ここで検討された日本人表象が、現在のロシア文学ではどのような様相を呈しているのかについても言及することにより、今後の展望を示す。

^A 作者ヴァレンチン・サーヴィチ・ピークリ(1928-90)は保守派の歴史小説家であり、主に一九六〇年代から八〇年代にかけてその作家活動を展開する中で、戦争物や冒険物のジャンルを中心に、数多くの長篇・中篇小説や小品を残した。八〇年代には所謂^{いわゆる}ピークリ・ブームが到来し、ベストセラー作家としての一時代を築いた。

だが、こうした広範な読者層の獲得にも拘らず、ロシアで与えられる評価は決して高くはない。ピークリの作風は、自ら掘り起こした帝政期の歴史資料を駆使し、架空の人物を絡めつつ、大胆かつ独創的なストーリーを構想するというものだが、作品中の史実の無視や歪曲をめぐっては歴史家達による強い非難や反論が提出され、その芸術的価値に関しては文芸批評家達からの酷評に晒されることも多々あった。また、当然日本での知名度も低く、小説そのものに美的価値を置きテキスト分析の対象とした先行研究はほぼ見当たらない。

^B 「オキヌさんの物語」(1981)は、日露戦争を題材とした四部作の一作である。この小説は、三部構成をとっており、日露戦争とロシア革命(十月革命)という二つの重大な歴史的事件を背景に、

ロシア人男性と日本人女性の〈恋愛〉物語が一つの軸となり、メロドラマ風な展開を見せる。海軍士官ココフツェフは、明治維新後の長崎で娼婦オキヌさんと出会い男子を儲け、戦争や革命下で別れと再会を繰り返す。革命後は造反分子として政府に追われ、シベリアや満州、上海へと逃れ、最終的に行き着いた長崎のスラム街で、偶然見つけたオキヌさんと同棲し窮乏の果てに心中する。

このような物語が先述した作風を持つ作者によって描かれ、またそうした小説が当時大衆的人気を博したという事実を踏まえ、ここではこのテキストがおかれた歴史的・政治的文脈を意識しつつ、「オキヌさんの物語」から次の四つの問題を浮上させたい。

第一に、作者が一度も日本を訪れることなくペテルブルグの地で、歴史資料や新聞記事等の過去の累積情報及び当時流布していた二次的情報を手がかりに、想像上の〈日本人〉をこの小説で描いていることから、〈日本人〉に関するロシアの集合的記憶と、ある一定の汎用性を持つ〈日本人〉のタイプの投影という問題が考えられる。

第二に、ピエール・ロチ「お菊さん」等に代表されるオリエンタリズムの物語と同様、西洋と東洋の恋が常に宗主国の男と植民地の女との間に起きるという典型的パターンが、この小説においても、西洋の側に立つロシア人将校と東洋の側に立たされる日本人娼婦の〈恋愛〉のプロットとして踏襲されているという問題がある。

第三に、日露戦争とロシア革命という、アジアともヨーロッパとも異質な〈ロシア〉を改めて強く意識せざるを得なかった二つの歴史的事件が、小説のプロットを動かす力となっていることを考慮すれば、この小説には西欧的なオリエンタリズムで捉えきれない日本人表象の可能性という問題が引き出される。日露戦争の敗北は、アジアとの関係においてロシアとは何かを問う契機となり、またロシア革命はヨーロッパとの関係においてロシアとは何か、どうあるべきかを考える契機となったと考えられるためである。

第四に、この小説の執筆時期に、ソ連はアフガニスタン侵攻やモスクワ・オリンピックという国際政治上の微妙な問題に直面していることから、ここには、その時点からの日露戦争やロシア革命の歴史的問い直し、またこの時点での〈日本人〉の意味づけ、さらにそれを受容ないし支持する多くの読者の存在といった、当時の社会的状況を知る上で興味深い問題が孕まれていると考える。

以上の四点を前提とした上で、「オキヌさんの物語」における「ムスメ」と「サムライ」という二種の日本人表象を具体的に検討していく。エドワード・W・サイドは、ヨーロッパ芸術の異国趣味の一思潮ないし東洋学の用語であったオリエンタリズムを、十八世紀以降の「オリエントを支配する大ヨーロッパ的」大西洋権力」としての知のあり方や言説へと敷衍し、すなわちそれこそが「オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式」^{スタイル}でもあったことを批判的に明らかにした。以下の考察では、こうしたサイドの言うオリエンタリズムを西欧的オリエンタリズムと定めて分析の軸とし、それとの共通性と差異から、この小説の日本人表象を捉えることにより、ロシア

のオリエンタリズムの一面を提示したい。

「オキヌさんの物語」における日本人表象は、「ムスメ」と「サムライ」の二種に大別される。オキヌさんに代表される「ムスメ」は〈娼婦〉の集合体として、また「サムライ」は〈軍人〉の集合体として捉えられるものである。この小説の構成部分のうち、「ムスメ」の描写は、幕末の開国後から日露戦争の開戦前夜までの、いわば平時に当たる第一部に集中しており、一方「サムライ」の記述は、日露戦中およびその直後という、戦時を中心に扱う第二部により多く見られる特徴がある。

この小説には、「ムスメ」は、主に三つの特徴を持つものとして現れる。第一に、「彼のとても小さくてかわいらしいミツミツは（中略）生の塩鮭を数切れ盛りつけた小皿を客の方にすすめると、彼女は後ずさりして部屋の片隅に正座した」というように、外見や小道具によってその小ささが強調される。第二に、ひたすら〈自然〉に近い地点に置かれ、第三に神秘的な〈美〉として理想化される。それらは、例えば、「女は、平盆の上に、花と果物を並べて、美的センスに満ちたみごとな静物画を作ってみせ、そこに米粒をふりかけた。この絵の背景は、空だった。そして、女は、月光に顔を向けてお座りくださいとココフツェフに言った。それで、彼はとても不思議な胸のときめきを覚えるのだった。女、月、静寂、永遠……」という形で表れる。さらに、オキヌさんの場合、このような特徴に加え、ココフツェフを誘惑し、最終的には無理やり死の世界に引きずりこむ、〈宿命の女〉としての筋立ても用意されている。

このように、「オキヌさんの物語」では、「ムスメ」が、西欧近代のロマンティズムとエロティシズムの重なり合う地平に、過度に 1 ようにして形作られるという特徴が見られる。これは、十九世紀末ロシア象徴派を中心に持て囃されたフランス経由のジャポニズムの系譜につながるものだろう。そして、このジャポニズムがオリエンタリズムと密接に関わることは、「民族精神をより反映するのは男だろうか、それとも女だろうか？ 日本の民族精神を映し出す鏡が女ならば、僕はあの国と戦うこともないだろうに」という、ペテルブルグの日本大使館での宴席で、日本の屏風等の調度品に目をやりつつ発せられたココフツェフの言葉からも明白である。

それは、ロシアの民族精神は不問のまま、優位な立場から「日本の民族精神」を「女」として幻想したいという、西洋が東洋に課し続けた東洋に対する女性化の欲望の典型的な表れとして読める。この小説の中で「ムスメ」たちが日露戦争を境に姿を消すことも、そうした幻想への欲望の 2 と見なすこともできよう。そして、その意味で、「オキヌさんの物語」は、「ムスメ」に焦点を当てた場合、西欧的オリエンタリズムとの共通要素を持つといえ、そこに見られる無意識的なオリエンタリズムの言説にこそ、それが内面化されたものにはかならないと考えられる。

「サムライ」は、数名の特定人物を除き、全く個人の人格が欠如した単なる軍人の集合体として語られ、基本的には異質なものに向けられる嫌悪と蔑視の表象となっている点で、「ムスメ」の場合とは大きく異なる。

例えば、嫌悪は、「ヨーロッパの礼儀正しいブルジョア外交は、野放図なまでの厚かましい外交をサムライたちによって教えられた」といった無分別の強調となって表れる。また、蔑視は、「齒をむき出したサムライの顔は、いっそうおぞましくなる一方だった」とあるように、獐猛な〈動物〉へのイメージ化や、「彼ら」引用者注：サムライは二人ともヨーロッパ風の燕尾服とシルクハットを着用していた。サムライたちは、入口で自分の靴を置き、白い足袋を愚かな様子で見つめていた」というような、表面上ヨーロッパ人になりすまそうとしても見え透いている愚かさの比喩という形で、大きく二種に振り分けられる。

ただ、この小説では、こうしたオリエンタリズムの言説に典型的な修辭の反復が見られる一方で、サムライ表象にさらにもう一つの意味が付与されている点で特徴的である。例えば、「だが、チャイコフスキイは、どうせサムライたちはこちらが満足できるようなものは何も見せないだろうと、年寄りめいた愚痴をこぼした。(中略) 彼らは、ロシア人に隠すものは何一つないと誓いながら、機密のものを見せるどころか、逆にそれを隠そうとするのだった」とあるように、善良なロシア人を騙す狡猾な謀略家としての日本人表象を巧みに滑り込ませる仕掛けが随所に見られる。そこには、西洋に支配されるべき東洋であるはずの日本の不可解な〈反抗〉に対する嫌悪が見出せる。こうした謀略面の強調は、所謂西欧的オリエンタリズムの日本人表象とはまた異なると考えられる。このモチーフの再三の繰り返しが日露戦争の開戦前後の場面に顕著であることに着目すれば、日露戦争の敗北によりロシアで〈日本＝支配されるべきアジア〉の図式が成立し得なくなったという事情が、そのようにサムライ表象を屈折させていく一因になったといえる。

このように、「サムライ」は、西欧的オリエンタリズムを内面化するようにして典型的な形で表れた「ムスメ」とは異なり、単純な野蛮さだけではなく狡猾さという負の〈文明〉性をも孕む両義的な表象となっている。そのことは、異質な他者への嫌悪と蔑視という形でオリエンタリズムを内面化しつつも、日露戦争を一つの契機として、それが否定的な〈文明〉性という方向に屈折化せざるを得なかった、ロシアの日本人に関する集合的記憶の基層の一端を物語っていると見られる。

ここで、先述のオリエンタリズムの屈折化に関連し、東洋学者による東洋の表象が東洋に対する西洋の帝国主義的侵略と密接な関わりがあるという点に照準を合わせると、このテキストには、西欧的オリエンタリズムという、それまでの日本人表象の基盤となっていた文脈とは別の新たな文脈^Dの挿入が見られる。

例えば、「ドイツ参謀本部の将校たちは、サムライの陸軍をスパルタ式に鍛え上げ、イギリス海軍の将校たちは、あちらこちらの海域で日本艦隊を訓練していた」というように、謀略に長けた「サムライ」を「訓練」しその背後で操っているのは他ならぬドイツやイギリス等西欧列強諸国という構図が示され、〈日本人〉の負の〈文明〉性は〈日本人〉自らのものではないのだという論理へと移行していく仕組みになっている。

また、大火事に包まれた日本の町を見たロシア艦長が「貧しい日本人達がかわいそうだ……何とかして助けてやれないものか」と部下達を連れ火事場に赴き、「日本人は歓喜の叫び声を上げてロシア人を迎えた」という場面では、「ロシア人」の慈悲深さが「サムライ」のみならず貧しく哀れな「日本人」全体に波及する可能性が強調される。

さらに、黄色人種という理由で日本軍人が上海のイギリスレストランから外へ叩き出された話を聞いたココフツェフが発する「ここでは、外へつまみ出されたりなんかしない。それどころか、もし君が倒れそうになったら、支えてくれるくらいだ。ほんとうに、ロシア人はね、どんな皮膚の色であっても、人間さえよければ、まったく気にしないのだからね」という〈友愛〉の言葉は、その対象を「日本人」から「人種」へとすり替え、イギリスとの差異の強調により、欧米帝国主義の犠牲者であるアジアに対する同情の身振りを表す。

嫌悪から〈友愛〉への状況に応じた巧みなまなざしの変化や、「サムライ」から「日本人」へ、「日本人」からアジアへという同情の対象の拡大は、アジアを欧米諸国の植民地状態から救出できるのはロシアをおいて他にないという、屈折した建前上の民族解放の論理を、異民族支配の論理へと容易に展開できるよう準備された物語として読める。

こうした支配の正当化の論理が用意される背景には、日本との関係においては破綻したロシアの西欧的オリエンタリズムを乗り越えるために、新たな論理の要請がこの物語の設定時期にあったと考えられることや、一九七〇年代後半から八〇年代半ばにかけての領土的緊張関係や対米関係の悪化という、小説執筆時のロシアを取り巻いていた緊迫した国際情勢があると考えられる。北方領土をめぐる日ソ関係の緊張の膠着化ⁱⁱⁱ、またソ連軍のアフガニスタン侵攻による西側諸国の強い反発（モスクワ・オリンピックのボイコット）という状況下で、ロシアに西側諸国とは異なる独自のアジア支配の論理を求める土壌があったのであれば、この小説がベストセラーとなったことの背景の一端も理解できよう。

「オキヌさんの物語」のテキストに西欧的オリエンタリズムが内包されていることは、既に述べた通りである。だが、ここにはさらにもう一つの東洋支配の論理が重ねられており、そうした二重のオリエンタリズム——〈ロシア的オリエンタリズム〉ともいうべき支配の言説が、日本人表象をさらに複雑なものにしているのである。

（溝渕園子『翻訳』の文学誌 一部改変）

問一 二重傍線部 i ⅰ iii の言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア ⅰ エのうちからそれぞれ選びなさい。

i 敷衍する

ii 野放図

ア 封じ込める

ア 人を人と思わない横柄な態度

イ 捻じ曲げる

イ 興味本位で騒いでまわる態度

ウ 置き変える

ウ 身分不相応な望みを持つ態度

エ 押し広げる

エ 何の変哲もない実務的な態度

iii 膠着化

ア しだいに落ち着いて静かになること

イ ある状態に固定して変化しないこと

ウ 対立が激化して紛争状態に陥ること

エ 懸案であった問題に決着がつくこと

問二 空欄

1

2

に入る最も適切な言葉を、次のア ⅰ エのうちからそれぞれ選びなさい。

1 ア 軽視され矮小化される

2 ア 宿命あるいは必然

イ 侮辱され等閑視される

イ 変化あるいは挫折

ウ 美化され理想化される

ウ 拡大あるいは補強

エ 敬慕され神聖視される

エ 放棄あるいは解放

問三 次の文は、本文中のいずれかの段落の末尾に入るべきものである。その入るべき箇所の直前の五文字を抜き出さなさい。

だが、両者に共通するのは、一方的に〈ロシア〉側からのまなざしを受ける客体として描かれるということである。

問四 傍線部A「ヴァレンチン・サーヴィチ・ピークリ」の評価について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 戦争物や冒険物でベストセラー作家としての一時代を築いたが、西洋諸国からは蔑視され続けた様子がうかがえる。

イ その芸術的価値に関する評価は決して高くはないため、ロシアでの知名度は低く、先行研究はほぼ見当たらない。

ウ 保守派の歴史小説家であったため強い非難や反論が提出されたが、八〇年代になると世界的なブームが到来した。

エ 日本人を、非人間的な風貌と劣った文化を持つ野蛮人として描いたため、文芸批評家達からの酷評に晒された。

オ 自ら発掘した歴史資料を駆使してストーリーを構想する作風で読者を獲得したが、史実の無視や歪曲が指摘された。

問五 傍線部B「オキヌさんの物語」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア この小説は、宗主国の男と植民地の女の間に起こる恋愛を描いたピエール・ロチ「お菊さんの」プロットを剽窃ひようせつしているという問題がある。

イ この小説には日露戦争とロシア革命という歴史的事件が描かれており、ロシア特有のオリエンタリズムによる日本人表象が認められる。

ウ 日本人娼婦と恋愛するロシア人を描いたこの小説は、アジアやヨーロッパとの関係においてロシアはどうあるべきかを考える契機となった。

エ アフガニスタン侵攻やモスクワ・オリンピックという当時のソ連の社会状況により、この小説の執筆は国際政治上の微妙な問題となった。

オ 作者は一度も日本を訪れたことがなかったため、この小説に描かれた想像上の〈日本人〉はロシアの集合的記憶との齟齬そごが生じている。

問六 傍線部C「サムライ表象にさらにもう一つの意味が付与されている」とあるが、「もう一つの意味」に相当する言葉を、本文中から七文字で抜き出しなさい。

問七 傍線部D「新たな文脈の挿入が見られる」とあるが、「新たな文脈」とはどのようなことを指しているか。本文中の言葉を用いて五十文字以内で説明しなさい。